

ヒバクシャからの

伝言

① 寄稿
黒岩史成



この春のこと。「仕事資料」と書かれた古い段ボール箱を開けると、一番上に古びたノートが何冊もあり、表紙の「被爆者取材」の文字がすぐに目に入った。「あの時のノートだ。私は思わず、手に取った。ノートは全部で4冊。1990年、報道記者時代に、『原爆の日』特集のNHKスペシャル「なぜ助けられなかったのか」広島・長崎7000人の手記」のリリースのために、全国にヒバクシャを訪ね、その証言を

書き留めたノートだった。リサーチは10の都道府県の33人にのぼった。被爆当時16歳だった長崎県の男性Sさんは、最近まで誰にも話せなかったことがあると、打ち明けてくれた。原爆投下直後、必死で逃げる途中、助けを求めた人たちに何もなかったことだと言った。去年ノーベル平和賞を受賞した「日本被団協」（日本原水爆被害者団体協議会）は、「核なき世界」を実現するため、1956年の結成以来ずっと、ヒバクシャ

「心の苦しみ」

黒岩 史成氏（くろいわ・ふみなり）松本深志高校、東京大学卒。元NHK記者。「知られざる結核後遺症」「障害者が歌う第9合唱」「教師宮澤賢治」「日系人『不忠誠組』姉弟の戦後」などを独自の視点でリポートした。安曇野市堀金鳥川出身。

の証言をもとに、原爆が人間に何をしたか、その「真相」を明らかにしてきた。番組は、「日本被団協」の調査を基に、肉親や助けを求めた人たちを「見捨てて逃げた」という「罪の意識」にさいなまれ続けた人たちがいることを伝えた。Sさんは、爆心地から1・6キロの自宅で被爆。「がれきの下から、年老いた女性と、幼児4、5人が、『助けてください』と泣き叫んでいたが、自分が助ければいいと、見捨てて逃げた。いまだに、あの人たちが

言」を直接聞いた一人として、その「伝言」をどうしたら伝えていけるのか。取材ノートを読み返しながら、切実に考え始めた。

安曇野市堀金鳥川の元NHK記者・黒岩史成さん（69）の寄稿「ヒバクシャからの伝言」を5回に分けて掲載します。黒岩さんは35年前、NHKスペシャルの番組制作のため、記者として全国の被爆者取材しました。原爆投下から80年となり、記憶の継承が危ぶまれています。被爆者の証言に直接触れた一人として、その証言と被爆の実相を伝えるため、記者時代の記録と記憶に再び向き合いました。

ヒバクシャからの

伝言

②

寄稿

黒岩史成



35年前の取材ノートに記された「ヒバクシャからの伝言」。中部地方に住む女性Yさんは、被爆体験をひと通り語り終えたあと、ふと宙を見つめてつぶやいた。「あの時、けがをした我が子を置いてでも、助けを求めた人を助ければよかったんですかね?」。そこには、繰り返し自問自答してきた「心の苦しみ」がある

「日本被団協」（日本原

水爆被害者団体協議会）は、

1985年から翌年にか

て、大規模な原爆被害者調

査を行った。被爆者約1万

3000人が回答。この調

査から原爆被害の「実相」

「心の傷」そして「罪の意識」

の数々が、明らかになっていった。投下直後の「無差別な死」「死のむごさ」

「確かめようもない死」、そ

の後ヒバクシャを蝕んだ

「急性原爆症」「苦しみぬ

いたあぐくの死」、さらに

「原爆ゆえの差別や偏見」、

40代ころから次々と襲った

「遅れてくる原爆死」もう

ひとつ、調査から浮かび上

がってきたのが「心の傷」、

そして「罪の意識」だった。

分析に当たったのは、社

会学者で長年被爆者調査に

携わってきた石田忠さん。

「あの日や、その直後のこ

とで、いまでも忘れられな

いこと、恐ろしく思ってい

ること、心のこりなこと

があるか」という質問に答

えた人のうち、1000人

を選んで詳しく調べた。そ

の結果、少なくとも710

人のひとが、被爆体験を思

い出すたびに、死の恐怖な

ど強い精神的苦痛を感じる

と答えた。石田さんは、こ

れを原爆がもたらした「心

の傷」と呼んだ。そのう

ち、少なくとも231人

が、被爆直後の自分の行動

に、何らかの「罪の意識」

を感じていることもわかっ

てきた。

原爆が突然引き起こした

極限状態の下で、感情を失

い、生き延びたいという衝

動だけに支配された人々。

しかし、自分を取り戻すに

つれて、助けを求めた人

に、何故何もしてあげられ

なかったのかという「罪の

意識」が生まれ、苦しみ

さいなまれていった、と石

田さんは指摘した。被害者

である人々を苦しめる「罪

の意識」。この二重の苦し

みこそが、原爆が遺した最

も深い「心の傷」だと、石

田さんは言う。

（くろいわ・ふみなり、元

NHK記者・安曇野市堀金

烏川）

ヒバクシャからの

伝言

③

寄稿

黒岩史成



1990年、私がヒバクシャの証言を伝える番組を取材するきっかけになったのは、「日本被団協」がその年の4月に開いた研究会だった。社会学者の石田忠さんが報告した内容に、胸を衝かれた。端的に言えば「広島・長崎のヒバクシャの中には、助けを求めた人を見捨てて逃げたことを、ずっと悔やみ続けている人

たちがかなりの数にのぼる」という指摘。被害者であるヒバクシャが、助けられなかった人たちに「罪の意識」を持ち続け、償いを果たそうとしてきた、とい

う。「原爆は人間に何をしたのか」という問いに答えらる上で、一つの手がかりなのではないか。ヒバクシャの方々の話を聞きたい、直感的にそう思った。「人間

「償い」を生きる「尊厳」

の尊厳」という言葉が頭を過った。

東京の男性Hさんは、被爆後の人生を、埋葬場所を見届けられなかった弟の遺骨探しに充てて来た。当時29歳だったHさんは、広島で被爆。大けがをした弟を連れて行った救護所の悲惨な有様に打ちのめされ、その場を離れたという。助けを求めて来る人々を避けながら、どこをどう歩いたのか、何をしていたのか覚えていないという。2日後、弟の死は見届けられましたが、何もしてやれなかった。

石田忠さんは「原爆投下直後、極限状態の下、感情を失い、生き延びたいという衝動だけに支配された人々が、自分を取り戻すにつれて、『罪の意識』に苦しめられるようになった」と指摘した。そして「戦争や原爆のせいだと片づけられなかったのは、人間だからであり、そこに人間の尊厳がある」と。

「どうしたら、弟や助けを求めた人に、償いができるかと思ってきた」と言うHさんは、74歳になったその年、弟の遺骨探しに区切りをつけた。弟が葬られた

のはここだろうという場所に、千羽鶴を手向けた。取材の最後に「償いは終わっただんですか」と質問すると、「そう思いたいんです」。絞り出すようにそう答えた。「私の命はもう長くはありません。償いは終わったと思わずに死んだとしたら、私の人生は何だったんでしょうか?」。その言葉が、いまも私の心に残っている。そこにいるのは、私かもしれない。あなたかもしれない。

(くろいわ・ふみなり、元NHK記者・安曇野市堀金烏川)

ヒバクシャからの

伝言

④

寄稿

黒岩史成



1990年の取材ノート 「夢ではない。床に就くに証言が記されたヒバクシャたち。当時すでに、「あの日」助けられなかった人々への償いの思いを胸に、老いを迎えようとしていた。76歳になった東京の男性Oさんは、「最近、広島から帰って来たら、毎晩、死者たちが現れるようになった」と言う。「夢ではないのか」と尋ねると、

死者への思い

Mさんは、広島での被爆体験を語る時、必ず話すことがあった。助けを求めた子供を蹴とばして逃げたことだ。「逃げる途中、突然、左の足首をつかまれました。咄嗟に足元を見ると、顔が大きく膨れた4、5歳の子供で、片方の眼が飛び出して顔にへばりついていました。怖くなって、その子を蹴とばして逃げました」

Mさんは、そのことを話したあと、こう結んだ。「私がこの話をするのは、『懺悔』です。懺悔し続ければ、死んでいったあの子たちが、許してくれるのではないか、これでこらえてくれるかしらと。この大きな十字架は私が死ぬまで引き摺っていかねければなりません」と。

取材ノートの証言を書き起こす作業を始めたころ、Mさんのその後がふと気になった。Mさんは、地域の被爆者団体のリーダーの一人として、語り部の一人として活動し、その体験をホームページに残していたが、いまから17年前、86歳で亡くなっていた。

【次回は10日に掲載します】

NHK記者 安曇野市堀金 烏川

ヒバクシャからの

伝言

⑤

寄稿

黒岩史成



取材ノートの「ヒバクシャの伝言」を伝えていこうと思いついたきっかけは、4月に松本で開かれた栗原淑江さんの講演だった。栗原さんは、私が取材した1990年当時、「日本被団協」の事務局員だった方で、いまは、NPO法人「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」の活動に携わっている。

取材ノートの「ヒバクシャの伝言」を伝えていこうと思いついたきっかけは、4月に松本で開かれた栗原淑江さんの講演だった。栗原さんは、私が取材した1990年当時、「日本被団協」の事務局員だった方で、いまは、NPO法人「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」の活動に携わっている。

栗原さんは講演で、大江健三郎さんの『生き方の定義』（1985年）から次の言葉を紹介した。「死んで行った人々を、生き延びる自分たちにつなぎ、次代に生きる人びとへ残す、核時代における切実な生き方の定義」。この言葉は、「被爆者の生き方」を表しているが、私も背中を押された思いだった。

ノーモア・ヒバクシャ

大江さんは、この言葉の前に「被爆者のねがい」を表す言葉だとして「日本被団協」がその前年発表した「基本要求」を引用している。その一部、《人類が二度とあの「あやまちをくり返さない」ためのとりでを築くこと。―原爆から生き残った私たちにとってそれは、歴史から与えられた使命だと考えます》

強く「ノーモア・ヒバクシャ」をめざしていく。それが「人間は原爆に何をすべきか」というひとつの答えなのではないか。そう思った。長野県では、今年「ヒバクシャの願いをつなぐプロジェクト」が、県内のヒバクシャや2世など13人の証言を記録した冊子を作成し、県内の学校に配布した。かけがえのない取り組みが進められてきた。

35年前の取材ノートから。長崎で被爆し「助けを求められた女性を見殺しにした」と悔やみ続けていた東京の61歳の男性Nさん。原爆投下で行方知れずになった母親の写真に毎日必ず話しかけてきたという。「きょうもどこにも原爆は落ちていないよ。みんなを守ってね」。教師だったNさんは、その体験をありのままに子供たちに語り続けていた。「ヒバクシャからの伝言」を受け取り、そのメッセージをひとりまたひとりと届けていく。「あの日」から80年の夏を生きる私たちが、次の世代に渡していかなければならないことがある。（くろいわ・ふみなり、元NHK記者⇨安曇野市堀金烏川）

⇨ 終わり